



インタビュー

男性社会のプロ野球球団で奮闘 「野球が好き」という気持ちが 支えてくれる



オリックス野球クラブ株式会社
リテール営業部イベント・運営グループ

はま だ あ や か
濱田安耶香さん

1983年生まれ、大阪府出身。
2007年オリックス野球クラブ(株)に入社。

プロ野球のオリックス・バファローズのマスコット、バファローブルとバファローベル。子どもたちはもちろん、おとなにも大人気です。球場に足を運ぶお客さまと触れ合うマスコットたちの横に寄り添い、彼らをサポートしているのが球団職員の濱田安耶香さん。プロ野球球団を職場に選んだきっかけや、仕事への思いについてインタビューしました。

① 球場内外でマスコットと行動を共にする

オリックス・バファローズ主催試合がある日の京セラドーム大阪。試合前には球場内外で様々なイベントが行われたり、マスコットとお客さまとのふれあいの時間をつくっています。私はマスコット担当として、マスコットとお客さまが楽しい時間を過ごせるよう、サポートするのが仕事です。年齢に関係なく、多くのお客さまがブルくんやベルちゃんに会いに来てくれ、なかには毎試合のように顔を見せてくださる方もいらっしゃいます。こうしたふれあいをきっかけに「次も野球を観に行ってみたいな」と思ってくださる方が増えてくれればいいなと思いながら、お客さまにお声がけをしたり、ふれあいがスムーズに進むようお客さまを誘導したりしています。

試合直前になると、今度はマスコットとグラウンドに出ます。試合前にマスコットはパフォーマンスをしたり、セレモニーのお手伝いや始球式を盛り上げたりするんですが、私

も進行に滞りがないよう気を配っています。試合終了後も、マスコットは再びグラウンドに出て、ネットのない席のお客さまとふれあいの時間を持ちます。グラウンドにいるときは時間が限られているので、いかに現場を円滑に動かすかが問われるので気が抜けません。マスコット担当の仕事はここで終わりますが、試合後、私は事務所に戻ってパソコンに向かい、事務仕事などの残務作業。ナイターの日、試合が終わって退社するのが23時ということもあります。



©ORIX Buffaloes

② 「野球が好き」小学生からの思いが支えに



シーズン中は土・日は当然仕事。シーズンオフはカレンダー通りの勤務になるとはいえ、選手に参加してもらって行うイベントの企画、次のシーズンに向けての準備など、次から次へと仕事が生れます。この仕事は、心身ともにタフさが求められる仕事だと思っています。小学生から高校生までずっと陸上競技をしてきたこともあり、体力には自信があります。それでも入社して10年、正直もう辞めたいと思ったこともありました。そのたびに、「やっぱり、私は野球が好きなんだ」という原点に立ち戻ることになっています。

私が野球に興味を持ったのは小学生の頃。両親と一緒に

高校野球の観戦で甲子園に行ったことがきっかけでした。何度か観に行くうちに私はすっかり野球が好きになり、いずれは高校で野球部のマネージャーになりたいと思うようになりました。しかし、小学生から始めた陸上競技を中学、高校まで続けていたことと、進学した高校では女子マネージャーを募集していなかったことで高校でその夢を叶えることはできませんでした。

高校生の時に足を故障し、ドクターストップがかかって競技生活を断念することになった私は「大学に行ったら絶対、野球部のマネージャーになる!」と決め、大学に進学。念願の野球部のマネージャーになることができたんです。マネージャーの仕事をする中で、将来はスポーツに携わる仕事がしたい、できれば野球に携わる仕事がしたいと思うようになり、うまくタイミングが合って今の会社に入社することができました。

③ プロ野球球団で働く覚悟と気概



とともに「やっていけるだろう」という気持ちもありました。

1年目はよく怒られました。仕事でミスをしては怒られ、グラウンドに降りるときの服装のことで怒られる。「女子だから許されると思ってる?!」といったようなニュアンスで指摘されへこみました。自分自身を振り返り、「怒られて当然のこと。次から気を付けよう」と切り替えて、前向きに取り組むようにしていました。グラウンドの中で働いているスタッフは、ほとんどが男性。共に気持ちよく仕事ができるよう、服装や態度は今も意識して気を付けています。

日本に12しかないプロ野球球団で、しかも現場の運営に携わる仕事に就けている。誰もが就ける仕事ではないし、現場で働いている女性は決して多くはありません。それだけに、仕事には喜びと同時に誇りも感じています。

大学の後輩に当たる女子学生から就職について相談を受けることもあります。「きちんと行動すること」とアドバイスしています。誠実にやることをやっていると、ピンチの時に助けてくれたり、陰で支えてくださる方がたくさんい

ます。私自身、入社してキャリアが浅いころは、イベントの企画や進行、運営など苦労しましたが、今ではイベントもまかせてもらえることもあり、少しずつ信頼してもらえるようになったのかなと思っています。

私が所属しているのはイベントを運営する部署。現在、男性2名女性2名で仕事をしています。事務方が立てた企画の大枠に対して、現場の私たちが「お客さまからこんな意見が来てたよ」「あれも必要じゃない?」といった意見を出すなど、男女の視点を混ぜ合わせながら、よりよいイベントづくりをめざしています。イベントをきっかけに二度、三度と球場に足を運んでもらい、オリックス・バファローズのファンを増やしたいですね。

